

2011/07/24

玄海原発耐震データ「誤入力」 九電も国も3年以上も「気づかず」

原発の耐震性に直結する非常に重要なデータが「誤入力」され、誤ったデータは、九電が2008年に国に提出した耐震安全性評価結果の中間評価で既に含まれており、九電も国もチェックが甘く3年以上も誤りに気づかなかった。その「誤入力」とは、重量を「2600トン」とすべきところを「260トン」と入力。その10倍も違う「誤入力」を保安院は「チェックすることができなかった」

これまで原発を推進してきた経済産業省。その中にある「原子力安全保安院」が原発の安全性を評価しているという根本的な問題が浮き彫りになっている。

7月24日西日本新聞トップニュースから抜粋

**玄海原発耐震データ誤入力 九電 薄い危機意識
3年以上も気付かず 副社長 発表当日知る
信頼回復は遠く**

九電が入力ミスしたデータは、原発の耐震性を評価するための基になる重要な数値だ。停止中の原発再稼働の可否を判断する国の安全評価にも使われるデータで、原発再開の遅れにも直結する。

委託先に任せて

誤ったデータは、九電が2008年に国に提出した耐震安全性評価結果の中間評価で既に含まれており、九電も国もチェックが甘く3年以上も誤りに気づかなかった。

データ入力を実際に手掛けたのは、九電子会社からの委託を受けた大手ゼネコンの大林組。入力ミスは3カ所で、原子炉建屋にある非常時に原子炉を冷やす水を入れた覆水タンクの屋根の重量を「2600トン」とするところを「260トン」とし、原子炉補助建屋の基礎に関する定数を2カ所で2倍にするお粗末なものだった。

九電は、下請けが作成した評価結果に対し、データの解析過程はチェックしたが、「データそのものは確認しなかった」

玄海原発耐震データに誤り、再稼働に遅れも

<2011年7月22日 21:43>ブックマーク [玄海原子力発電所\(佐賀・玄海町\)の耐震安全性の評価に使われたデータの一部に誤りがあったことがわかった。](#) これにより、全国の原発の再稼働に遅れが出る可能性が出てきた。

玄海原発3号機の耐震安全性に関するデータの誤りは、解析を請け負っていた「大林組」が入力するデータを間違えたのが原因。誤差が小さかったことから、施設全体の耐震性の評価に影響はほとんどなかった。

しかし、これを受け、経産省の原子力安全・保安院は、全国の電力会社などに対し、間違いをチェックする体制が取れているのかなどを、来月22日までに報告することを求めた。

この作業が終わらないと、原発の安全性を確認する「ストレステスト」の1次評価を始められないため、全国の原発の再稼働に遅れが出る可能性がある。

浜岡原発元設計士が告発「浜岡原発は耐震データを偽装して作られた」

2011/05/14 17:26

浜岡原発元設計士「耐震強度データに偽装があった」と告発

<http://tinyurl.com/3khwpxp>

「技術者が不完全なものを造るわけにはいきません。しかもあれほど危険なものを平気で造ることなんて…」

目に涙を浮かべてこう話すのは、千葉県在住の元エンジニア谷口雅春さん(69)。

東芝の子会社である「日本原子力事業」の技術者として、谷口さんは30年以上も昔、浜岡原子力発電所2号機の設計に携わった。1970年ごろから神奈川県横浜市にある東芝の工場に出向し、原子炉の炉内構造物の設計を担当。

当時、建設中の浜岡原発2号機については「炉心支持構造物」という原子炉の中核部分の設計にかかわり、耐震計算に必要な重量データを集計していた。

“事件”が起きたのは1972年5月だった

数十人の設計者のうち代表3人だけで開かれた会議に谷口さんも出席していた。

そこで代表者のうちの1人がこう打ち明けたのだった。

「いろいろ計算したがダメだった。この数値では地震が来ると2号機はもたない」

担当者がダメだという最大の理由は岩盤だった。

浜岡辺りでは200年周期でマグニチュード8クラスの大地震が起きているため、岩盤が極めて脆かったという。

「浜岡の地盤はそもそも岩どころか、握りつぶすことのできる砂利の集まったシャーベットのよう状態でした。さらに、大地震による断層や亀裂ばかりでぐちゃぐちゃになっていました」(谷口さん)

さらに原子炉建屋と核燃料集合体の「固有振動数」が、想定される地震の振動の周期に近いことがわかった。

固有振動数と同じだと揺れが何倍にも大きくなる「共振現象」を引き起こし、地震のリスクが激増してしまう。

あまりにショッキングな報告に「建設中止もやむをえないか...」と思った谷口さんの目の前で、先ほどの担当者がこう言った。

「データを偽装して、地震に耐えられることにする」

2号機は通産省(当時)に設置許可申請を出す直前だった。

谷口さんが振り返る。

「担当者は“岩盤の強度を測定し直したら、福島原発並みに岩盤は強かったことにする”“固有振動数はアメリカのGE社が推奨する値を採用し、共振しないことにする”などと次々と“対策”をあげていくんです」

堂々の“偽装宣言”を耳にした谷口さんは、良心の呵責に苛まれた。

「事故を起こしたら大変なことになるのは明白でした。技術者として、そんな危険な原発を造るなんてできるわけがありません。悩んだ末、私が辞めることで何かしら警告になるのではないかと思い、会社を去ることにしました」(谷口さん)

上司に辞意を伝えて自分のデスクに戻ると、耐震計算の結果がはいった3冊のバインダーがなくなっていた。

「隠ぺいが漏れないようにということからか、関連会社の仕事をいろいろ斡旋され慰留されました。でも、続けていても飼育殺しになるだけ。きっぱり辞めることを決めました。しかし残念ながら私の退社はまったく警告になることなく、彼らは原発建設を強行してしまっただけです」(谷口さん)

女性セブン 2011年5月26日号

今回の震災が起こってから、今まで隠されていた暗部が次々と明るみになっていますが、まさかここまでひどいとは！

もし今回の大地震が東北ではなく、東海地方だったとしたら…

日本はどうなっていたのでしょうか？

いや人類は…

浜岡原発元設計士「耐震強度データに偽装があった」と告発

2011年05月13日16時00分 提供:NEWSポストセブン

43 コメント 353total 「技術者が不完全なものを造るわけにはいきません。しかもあれほど危険なものを平気で造ることなんて…」

目に涙を浮かべてこう話すのは、千葉県在住の元エンジニア谷口雅春さん(69)。東芝の子会社である「日本原子力事業」の技術者として、谷口さんは30年以上も昔、浜岡原子力発電所2号機の設計に携わった。1970年ごろから神奈川県横浜市にある東芝の工場に出向し、原子炉の炉内構造物の設計を担当。当時、建設中の浜岡原発2号機については「炉心支持構造物」という原子炉の中核部分の設計にかかわり、耐震計算に必要な重量データを集計していた。

“事件”が起きたのは1972年5月だった。数十人の設計者のうち代表3人だけで開かれた会議に谷口さんも出席していた。そこで代表者のうちの1人がこう打ち明けたのだった。

「いろいろ計算したがダメだった。この数値では地震が来ると2号機はもたない」

担当者がダメだという最大の理由は岩盤だった。浜岡辺りでは200年周期でマグニチュード8クラスの大地震が起きているため、岩盤が極めて脆かったという。

「浜岡の地盤はそもそも岩どころか、握りつぶすことのできる砂利の集まったシャーベットのよう状態でした。さらに、大地震による断層や亀裂ばかりでぐちゃぐちゃになっていたんです」(谷口さん)

さらに原子炉建屋と核燃料集合体の「固有振動数」が、想定される地震の振動の周期に近いことがわかった。固有振動数と同じだと揺れが何倍にも大きくなる「共振現象」を引き起こし、地震のリスクが激増してしまう。

あまりにショッキングな報告に「建設中止もやむをえないか…」と思った谷口さんの目の前で、先ほどの担当者がこう言った。

「データを偽装して、地震に耐えられることにする」

2号機は通産省(当時)に設置許可申請を出す直前だった。谷口さんが振り返る。

「担当者は“岩盤の強度を測定し直したら、福島原発並みに岩盤は強かったことにする”“固有振動数はアメリカの GE 社が推奨する値を採用し、共振しないことにする”などと次々と“対策”をあげていくんです」

堂々の“偽装宣言”を耳にした谷口さんは、良心の呵責に苛まれた。

「事故を起こしたら大変なことになるのは明白でした。技術者として、そんな危険な原発を造るなんてできるわけがありません。悩んだ末、私が辞めることで何かしら警告になるのではないかと思い、会社を去ることにしたんです」(谷口さん)

上司に辞意を伝えて自分のデスクに戻ると、耐震計算の結果がはいった 3 冊のバインダーがなくなっていた。

「隠ぺいが漏れないようにということからか、関連会社の仕事をいろいろ斡旋され慰留されました。でも、続けていても飼育殺しになるだけ。きっぱり辞めることを決めました。しかし残念ながら私の退社はまったく警告になることなく、彼らは原発建設を強行してしまっただけです」(谷口さん)

女性セブン 2011 年 5 月 26 日号

原発の『想定外』は責任逃れのために作った指針」と専門家 2011.05.13 16:00

2009 年に刊行された著書『偽善エネルギー』(幻冬舎新書)の中で日本の原発は地震対策をしっかりと行うべきだと警告し続けてきた中部大学教授・武田邦彦氏は、自身が委員を務めた原子力安全委員会でのやりとりについて、苦い顔で振り返った。

2006 年 9 月、原子力安全委員会では耐震設計の審査基準を改定することになった。武田教授はこの基準を見て心底驚いたという。

「それまでは安全な原子力を造ろうという方針だったはずですが、このときの指針では、電力会社が地震や津波を想定し、それより大きな地震があったら『想定外』とみなす、つまり仕方がないという内容だったのです」(武田教授)

さらに指針には、「原発に『想定外』のことが起こった場合、[1]施設が壊れて[2]大量の放射性物質が漏れて[3]著しくみんなが被曝する」とはっきり書かれていたという。

「それは、電力会社が想定しない範囲であれば、原発が壊れて国民が被曝してもいいという意味です。この指針は、電力会社と保安院が結託して『想定外』には責任を取らないようにしたものなのです」(武田教授)

委員だった武田教授は、これでは責任逃れではないか、と委員会で食い下がったが、指針は通ってしまった。

「ぼくはそれまでは原子力推進派でした。でもこんなことを許すわけにはいかず、それ以後、原子力批判派に変わりました」(武田教授)

東京電力の清水社長が「津波は想定外」と繰り返したのも、この指針に沿った責任逃れだと武田教授はいう。

女性セブン 2011年5月26日号 **偽善エネルギー (幻冬舎新書)**

耐震データ提出に即時抗告 中部電力が東京高裁に

浜岡原発(静岡県御前崎市)運転差し止め訴訟で、中部電力は24日、静岡地裁の耐震データの提出命令を不服として、東京高裁に即時抗告した。

中部電は「メーカーの技術ノウハウに関するものが含まれ、メーカーへの守秘義務を契約上負っており開示できない」としている。静岡地裁は16日、「事故が発生すれば甚大な被害が及ぶ可能性のある

原発の安全性は社会共通の要請。企業秘密にも当たらない」として、同原発1-4号機の耐震性に関するデータを提出するよう同社に命じた。

静岡市の市民団体が起こした同訴訟は、東海地震への耐震性が主な争点となっている。

東海地震が起きれば直撃を受ける中部電力浜岡原発(静岡県御前崎市)の運転差し止めを市民団体が求めた訴訟で、静岡地裁は原発の耐震設計にかかわる重要データを全面開示するよう中電に命じる決定をした。全国各地で起きている原発訴訟で初めて。

宮岡章裁判長は「原発の安全性の確保は社会共通の要請であり、利益だ」と指摘。

「耐震設計の計算結果が正しいかどうか、計算の全過程について証拠調べをする必要がある」と述べた。決定は16日付。

提出が命じられたのは、原子炉炉心構造物や原子炉格納容器の耐震性についての計算書など。

中電はいったん提出したが、原告側は「マスキング(白塗り)ばかりで重要な部分が欠け、検討材料にならない」と全面開示を求めた。中電側は「企業秘密やメーカーのノウハウにあたる。ノウハウを持つ外国企業から守秘義務違反に問われたり、国際的な不信を買うおそれがある」などとして拒んでいた。

決定で宮岡裁判長は「原発の安全性の有無が裁判の最大の争点。安全性立証のためにやむを得ず公開しても、守秘義務違反などの問題が生じるかは疑問」と述べた。

原告弁護団は「データが提出されれば、東海地震の際の建物の耐震強度について専門的な第三者による検証が可能になる」と決定を評価。22日にも、中電に対して高裁に即時抗告しないように申し入れる方針だ。

<http://www.asahi.com/national/update/0322/TKY200503220150.html>
